

実験動物の年間販売数調査

(令和6(2024)年4月～令和7(2025)年3月の販売数)

はじめに

本調査は、実験動物販売数量の経時的把握を目的に、昭和60年度から令和4年までは3年度毎に行い、今回で14回目になりますが、今回は、実験動物業界を巡る状況の変化をいち早く反映すべく、2年間隔に短縮して調査しました。

調査方法は前回と同様で、①当協会(日動協)と日本実験動物協同組合(実動協)の会員及び会員以外で実験動物を生産・販売していると思われる者並びに大学、公的法人で実験動物を生産、販売(供給)していると思われる者の計29者を対象に、②令和6年4月から令和7年3月までの1年間に、③実験動物のユーザーに対し、直接、生産販売(供給)、仕入れ販売、輸入販売した実験動物数を、アンケート調査方式で把握しました。調査票は郵送し、販売(供給)実績のない場合も、その旨回答をお願いしました。

調査対象

調査対象は、日動協会員19者(うち、16者は実動協組合員)、実動協組合員21者(うち、16者は日動協会員)、大学の動物実験施設2者、その他の公的法人1者及び日動協、実動協に属さない2者の計29者です。うち28者から有効回答があり、このうち25者について実験動物の販売(供給)実績がありました。

アンケートの回答状況

区分	調査票送付者(A)	回答者(B)	Bのうち販売(供給)実績のある者	回答率(B/A) %
日動協、実動協	24	24	22	100
大学、公的法人等	3	2	2	67
その他	2	2	1	100
計	29	28	25	97

アンケート調査対象数の推移

年度 西暦	S60	S63	H3	H7	H10	H13	H16	H19	H22	H25	H28	H31	R4	R6
1985	1988	1991	1995	1998	2001	2004	2007	2010	2013	2016	2019	2022	2024	
調査依頼	81	87	66	65	57	52	66	52	44	44	45	38	29	29
有効回答	64	68	52	57	54	49	64	52	44	43	42	37	29	28
実績あり	60	56	45	49	44	43	40	44	44	39	36	33	26	25

調査結果掲載の「LABIO 21」のNo.	10	23	35	46	58	70	82	91	97
-----------------------	----	----	----	----	----	----	----	----	----

*「LABIO 21」は日動協の情報誌で定期購読ができます。

*日動協のHPでも公表しています。

調査結果概要

調査依頼者は、S60 年度(第 1 回)調査の 81 者から今回 R6 年度の 29 者へと、この 40 年間で約 1/3 になり、実験動物の販売(供給)実績のある者も 60 者から 25 者へと同様の傾向です。

主な動物種毎に見ると、前回(令和4年度)に比べて、販売(供給)数はスナネズミ以外の全ての動物種で減少しています。マウスは最多であった S63 年度(939 万匹)の 26%(246 万匹)にまで、ラットは同 H3 年度(380 万匹)の 12%(44 万匹)にまで、モルモットは同 H10 年度(535 千匹)の 7%(36 千匹)にまで、ウサギは同 S60 年度(334 千匹)の 6%(21 千匹)にまで、イヌは同 H3 年度(39 千頭)の 8%(3 千頭)にまで、また、ネコは同 S60 年度(114 百匹)の 2%(2 百匹)にまで、各々減少しています。そして、減少傾向は今回の調査でも引き続いています。なお、近年の実験動物への要求の高度化を反映し、遺伝子改変動物がマウスでは平成 7 年度(762 匹)の 58 倍(4 万4千匹)、ラットでは前回令和4年度(74 匹)の 3 倍(225 匹)と急増しています。

サル類は S60 年度から減少傾向にあったものの、H10 年度を底に増加に転じましたが、H19 年度を頭に再度減少に転じ、今回は 422 頭でした。これは、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックによりワクチン開発、治療薬開発の緊急性が増し、基礎研究に用いるカニクイザルの需要が急増する一方で、2020 年度から中国からのサルの輸入が停止されたこと、更には 2022 年度にカニクイザルが絶滅危惧種に指定されたことを背景にサルの価格が高騰したことから、販売頭数の減少につながったものと考えられます。なお、展示用も含めた輸入頭数(下欄参照)は、今回(R6 年 1-12 月) 5,376 頭となり、前回 R4 年度と同様、本調査頭数との乖離(4954 頭)がありました。これは、ユーザーの直接輸入及び本調査先以外からの購入が多数あることに起因すると思われます。

ブタは S60 年度から増加し H10 年度を頭に減少に転じ、そして H19 年度を底に増加に転じましたが、H31 を頭に減少に転じ、今回は 3,533 頭でした。

また、鳥類及び種鶏卵については、今回の調査より、企業グループ内での社間売買について調査結果に反映させたため、前回調査より増加する結果となりました。

遺伝学的区分別(クローズドコロニー、近交系等)に見ると、マウスではクローズドコロニー、近交系とミュータント系で 96%、ラットではクローズドコロニーが 87% を占め、この傾向は前回 R4 年度と同様でした。

微生物統御区分別(コンベンショナル、クリーン、SPF)に見ると、マウス、ラット、モルモット、ハムスター類では、SPF が概ね 100% でした。

参考

サル類の輸入頭数

サルは H17 年 7 月 1 日以降、試験、研究及び展示用以外は輸入禁止となり、輸入頭数は、毎年、農水省の動物検疫所が公表しています。(動物検疫年報(1-12 月))

H19 年:7,464 頭、 22 年:5,820 頭、 25 年:5,215 頭、 28 年:5,834 頭

31 年:4,885 頭、 R4 年:5,386 頭、 R6 年 5,376 頭(R5 年度 7,192 頭)

* 検疫施設からの解放頭数。R6 年は速報値。

実験動物販売数 (R6(2024)年度)

匹、頭

動物種	コンベンショナル	クリーン	SPF	合計(対前回比)		参考	
						R4年度計	最大値 年度
マウス							
クローズドコロニー	0	0	743,491	743,491	(0.94)	794,913	
近交系	0	12	1,416,300	1,416,312	(0.98)	1,449,007	
交雑群	0	0	51,495	51,495	(0.76)	67,472	
ミュータント系	0	0	202,946	202,946	(0.88)	230,409	
コンジェニック系	0	0	997	997	(0.41)	2,403	
遺伝子改変	0	0	44,157	44,157	(1.06)	41,795	
マウス計	0	12	2,459,386	2,459,398	(0.95)	2,585,999	9,389,912 S63
ラット							
クローズドコロニー	0	0	380,733	380,733	(0.86)	442,963	
近交系	0	0	22,283	22,283	(0.73)	30,654	
交雑群	0	0	0	0	(-)	183	
ミュータント系	0	0	9,563	9,563	(1.06)	9,012	
遺伝子改変	0	0	225	225	(3.04)	74	
ラット計	0	0	412,804	412,804	(0.85)	482,886	3,801,348 H3
モルモット	0	0	36,005	36,005	(0.79)	45,605	534,833 H10
ハムスター類	0	0	11,184	11,184	(0.56)	20,022	82,510 H10
その他のげっ歯類	0	0	487	487	(1.51)	322	40,263 H10
ウサギ	46	5,918	15,456	21,420	(0.74)	29,000	333,824 S60
イヌ	3,130	0	0	3,130	(0.98)	3,189	38,915 H3
ネコ	19	150	13	182	(0.95)	192	11,415 S60
サル類	422	0	0	422	(0.23)	1,843	3,462 H19
ブタ	825	10	2,698	3,533	(0.83)	4,257	5,085 H31
ヤギ	0	0	0	0	(-)	11	84 H10
縊羊	0	0	0	0	(-)	0	66 H10
鳥類	2,312	0	7,386	9,698	(9.27)	1,046	44,830 S63
種鶏卵	25,564	0	64,585	90,149	(4.01)	22,493	1,053,479 H3
その他の動物種	哺乳類	111	2	5	118	(0.79)	149 4,469 H10
	哺乳類以外	1,388	0	0	1,388	(0.93)	1,493 26,557 H13

(注) 1. () 内は対前回比 (R4年度比)。

2. マウス、ラットのSPFには無菌動物を含む。

3. その他のげっ歯類はスナネズミ。

4. その他の動物種の哺乳類はスンクスとフェレット。

5. 右欄の「最大値 年度」とは、これまでの調査で最大数となった年度とその匹数、頭数。